

皇太子草壁の歌

新谷 正雄

一 はじめに

万葉集卷二相聞、持統代冒頭には、大津皇子、草壁皇子
(日並皇子尊) (ひなみのみこのみこと) に関連した歌々、一〇五―一〇七が、次の
(1) 通り並ぶ。本稿は、この歌群について従来言われて来た理
 解を見直したく、まず一〇七歌を取り上げ、その意義を考
 察してみたものである。

ふさはらのみくにあめのしたしうすめしすめらみことのみよ
 藤原宮 御 宇 天皇代(脚注略)

大津皇子の竊かに伊勢の神宮に下りて上り来ましし
おほのひめみこ ひそ かむみや
 時に、大伯皇女の作りませる御歌一首

わが背子を大和へ遣るとさ夜深けて暁露にわが立ち濡
あかときつゆ
 れし

二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君が独り越ゆ
 れし

(2・一〇五)

らん

大津皇子の石川郎女に贈れる御歌一首

(2・一〇六)

あしひきの山のしづくに妹待つとわが立ち濡れし山の
 しづくに

(2・一〇七)

石川郎女和へ奉れる歌一首

吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成ら
 ましものを

(2・一〇八)

大津皇子の竊かに石川郎女に婚ひし時に、津守連通
つし守のむすことほる
 のその事を占へ露はすに、皇子の作りませる御歌一
 首(いまだ詳らかならず)

大船の津守が占に告らむとはまさしに知りてわが二人
おほふね
 宿し

(2・一〇九)

日並皇子尊の石川女郎に贈り賜へる御歌一首(女郎は

字を大名児といへり
あなな おはなこ
をちかた

大名児彼方野辺に刈る草の束の間も吾忘れめや
かや つか われ

(2・110)

一〇五―六歌は、伊勢神宮から帰京する大津皇子を見送った、その同腹の姉、斎宮であつた大伯皇女の歌である。一〇七―一一〇歌は一連のもので、二人の男、大津、草壁と、一人の女、元々は草壁の妻（関係する女）の一人であつた石川郎女を巡る歌々である。⁽²⁾

二 問題の所在

この歌群は一般に、天武崩御、持統称制開始直後に起きた、大津皇子謀反に絡めて論じられている。謀反は持統称制の間の事件であり、その限りに於て、標「藤原宮御宇天皇代」とは矛盾しない。しかし個々の歌の内容から見ると、天武崩御という緊迫した政治状況の中で、これらの歌が詠まれたとは思われない。

一〇五―六歌は、大津の伊勢往復時の歌である。その伊勢往復の時期について、天武崩御の後とするもの、その前後とするもの、その直前、七・八月頃とするもの、と諸説有り、見方が分れている。しかしいづれも無理な見方であろう。天武不例となつて（朱鳥元年五月）以降、大津は皇位継承の

有力者の一人として、持統、皇太子草壁側の嚴重な監視下にあつたと思われる。更に当時、勅許の無い私的な伊勢参拝は禁止されていた。⁽³⁾ 持統、草壁側が、監視下にある大津のそのような行動を、見逃すはずは無かつたと考える為である。

一〇七―一一〇歌四首は、大津、草壁と石川郎女を巡る争ひに関連した歌々である。大津と郎女の山での初会⁽⁴⁾の約束、関係の進展、そして大津の許へと去つた郎女への草壁の思い、という内容である。いづれも恋愛に関するもので、その展開がある。前二首同様、天武不例以降の政治的緊迫時に詠まれたものとは考えられない。

この歌群を、標との整合性を重視し、持統代に詠まれたとするのは無理と考えた。とするならば、この歌群がまとめられ、持統代冒頭にある理由は何なのだろうか。この歌群に対し、所謂「大津皇子物語」という理解がある。卷二編纂時、大津に対し、悲劇の皇子という物語が宮廷人の間に形成されて広まり、それが万葉集に収められた、⁽⁵⁾ というのである。歌群に物語性を見ようとする理解は評価し得る。しかし、標との関係を考えた場合、『釋注』が言うように、物語性を万葉集編纂者の営為と捉えた方が良いだろう。物語性とは、歌群が意味を持つことによつて成立する。歌を

並べ、意味を与えた編纂者の意図が、標との整合性を欠くにもかかわらず、当該歌群を持統代冒頭に配置させたと考えるからである。問題は、その意図が何なのか、ということになる。

この意図については、大津を中心を考えるのが一般的である。例えば『釋注』は、大津に対する「崇り^たを恐れての鎮魂の行為」としている。しかし歌群を、大津を中心としたものと見る立場には従えない。何故なら、大津は持統、草壁側にとり、謀反を起した人物である。謀反人の作歌、またそれを中心とした歌群を、死に関する挽歌ではない相聞の、持統代冒頭に配置することなど有り得ないと考えるからである。

万葉集卷一、二は、両者併せて所謂「万葉の三大部立」が揃う。この二巻は、現在見る二〇巻本万葉集の核として、他の巻々に先立って成ったものと考えられている。そしてこれらは「元明万葉」とも呼ばれ、成立は元明の天皇末期、或は上皇の時代と考えられている⁷。元明の夫は草壁皇子である。その草壁に謀反を起した人物を、草壁の即位を願った実母持統の、その御代冒頭に掲げるということが、元明の手になる「元明万葉」編纂に際してあったであろうか、という疑問である。元明は中継ぎの女帝として、その子文

武天皇の後に即位し、元正天皇に皇位を引継ぐことで、聖武天皇即位へとつながる持統からの皇統を守っている。

また当該歌群を、大津を中心としたものと見る一因に、大津は草壁との女を巡る争いに勝った、とする理解がある。そうとすれば、単に謀反を起した人物に関する歌群を、持統代冒頭に配置するかどうか、という問題だけではなく、他の問題も生じよう。女を獲得することと国を得ることが、観念の上で重ねられていた、とする考え方が⁸ある。とするならば、女との関係の維持に失敗した草壁は、大津に対し、支配者としての資質に於て劣っていた、ということになる。果してそのような歌群を、草壁の正妻であった元明が持統代冒頭に採り上げる、ということが有り得たであろうか、という疑問も生じるのである。

今、述べた二つの問題を、卷一、二の他の部立、雑歌、挽歌の中で確認しておきたい。一つは各々の持統代冒頭の在り様、一つは草壁皇子の在り様である。

*

まず卷一、二の雑歌、挽歌の持統代冒頭部分を見る。雑歌は次のように始まる。

天皇の御製歌^{みはみづた}

春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山^{しろたへころもは かぐやま}

（1・二八）
近江の荒れたる都を過ぎし時に、柿本朝臣人麿の作

れる歌

玉櫛たまぐすき 畝火うねびの山の 檀原かしはらの 日知ひじりの御代みよゆ……（以下

略）（1・二九）

二八歌題詞の「天皇」は持統である。この歌は、表現化されていないものの、「天の香具山」により、それと指呼の間に藤原宮から、持統が香具山を眺め遣り詠んだものと見られる。香具山を見て夏の到来を知ったとは、香具山が季節の変化が最初に現れる、つまり神々の世界に一番近い地であり、その傍らの藤原宮が大和（日本）の国の中心にあることを意味したものである。藤原宮に遷都した天皇は持統である。この宮讃めは、持統が自身の御代を称えたものと言える。

一方、次の「近江荒都歌」は、嘗ての宮殿の跡地には春草のみが繁り、霞が煙ると歌う。先の御代、近江大津宮の滅びの姿を歌っている。荒都歌は、過去の側から、持統の御代の繁栄を照らし出すものと言えよう。雑歌、持統代冒頭は、全体として持統朝讃歌群と言ってよいであろう。

卷二挽歌、持統代冒頭はどうか。次の通りである。

大津皇子かむみぎの薨おほくりましし後に、大来皇女おほくのみめの伊勢いつきのの斎宮みやよ

り京みやこに上りし時に作りませる御歌二首（一六三）四歌は省略）

大津皇子かばねの屍かつらぎを葛城かつらぎの二上山ふたかみに移し葬はふりし時に、大来

皇女みみの哀かなしび傷いたみて作りませる御歌二首（一六五）六歌は省略）

日並皇子あらしのみや尊の殯宮あらきのみやの時に、柿本朝臣人麿の作れる歌一首并せて短歌（一六七）九歌は省略）

冒頭の大伯皇女歌四首の意味が問われよう。一六三）四歌は、朱鳥あなとり元年十一月、伊勢斎宮から上京した時のもの、一六五）六歌は、大津を「移葬うつさう」した時のものである。いづれも弟、大津の不在と自身の悲しみを歌っている。これらは、この世に思いを残して亡くなったであろう大津の魂を鎮め、怨霊化して持統皇統に祟ることを予め排除しようとする編纂者の意図により、持統代冒頭に置かれたと考える。¹⁰⁾

以下、草壁皇子（持統三年薨去）に対する挽歌へと続く。作歌年順とも見られる配列だが、確かではない。一六五）六歌の作歌年次が不明であり、草壁皇子挽歌の後に詠まれた可能性があるからである。¹¹⁾年代順であろう、として済ますわけにはいかない。しかしこれが年代順であったとしても、それは結果であり、大津に対する鎮魂の歌が、挽歌、

持統代冒頭に置かれなければならない、その為にまずこの四首が、今見るように置かれたと考えるのである。

以上、卷一、二の雑歌、挽歌の持統代冒頭には、持統朝の現実の政治状況を反映しつつ、歌が配置されてあることを確認した。その中で相聞のみが、謀反の首謀者である大津に関する歌群を配しているとする見方は、やはり問題としなければならぬであろう。

*

先に示した二つ目の問題、草壁皇子の在り様、を次に見る。

卷一・二が一つの編纂体「元明万葉」として成立したのであれば、その中で草壁は、統一的な在り様を示しているであろう、他の部立に見る草壁の姿と、当該歌群に於ける草壁の姿との整合性はどうか、ということである。

草壁皇子は集中、次のように歌われている。まず人麻呂の「日並皇子尊挽歌」から。

日並皇子尊の殯宮の時に、柿本朝臣人麿の作れる歌一首并せて短歌（内、長歌のみ。異伝は省略）

天地の	初の時	ひさかたの	天の河原に	八百万
ちようつがみ	はじめ		あめが	やちようづ
千万神の	神集ひ	集ひ座して	神分ち	分ちし時に
あまの	かむつと	いま	あが	あしはら
天照らす	日女の尊	天をば	知らしめすと	葦原の
あまてらす	ひるめのみこと	あめ	あしはら	
瑞穂の国を	天地の	寄り合ひの極	知らしめす	神
みづは		きはみ		

の命と 天雲の 八重かき別けて 神下し 座せまつ
りし 高照らす 日の皇子は 飛鳥の 浄の宮に 神
ながら 太敷きまして 天皇の 敷きます国と 天の
原 石門を開き 神あがり あがり座しぬ わご王
皇子の命の 天の下 知らしめしせば 春花の 貴か
らむと 望月の 満しけむと 天の下 四方の人の
大船の 思ひ憑みて 天つ水 仰ぎて待つに いかさ
まに 思はしめせか 由縁もなき 真弓の岡に 宮柱
太敷き座し 御殿を 高知りまして 朝ごとに 御言
問はさぬ 日月の 数多くなりぬる そこゆゑに 皇
子の宮人 行方知らずも (2・一六七)

傍線部「神あがり あがり座しぬ」まで、前段では天武天皇の統治と崩御が歌われている。これを受け後段では、草壁の即位が待たれたこと、しかし薨去し、皇子に仕えていた人々が途方に暮れている、と歌われている。ここには、天武からの皇統を引継ぐ者としての草壁を歌おうとする姿勢が明確である。皇子の事蹟は語られていない。それは実際にそうであったから、ということもあるが、歌表現内部では、そのことにより一層、皇統の継承を歌おうとした歌の意図を際立たせている。

また、その即位を「四方の人」が待ったという叙述があ

る。具体性に欠ける内容だが、そこで草壁の魅力、資質を語ろうとしているのである。人々に推戴されてあることが、皇位に即く者に求められる要件であり、草壁は必要な魅力、資質を持っていたということである。そのような草壁に対する形象をここに見ることができるのである。

今述べたことは、人麻呂の挽歌に続く「皇子尊の宮の舍人らの働しば傷みて作れる歌二十三首」(一七一―一九三歌)、草壁皇子の舍人達による挽歌群にもあてはまろう。皇子を失った悲しみが繰り返され歌われており、人々に慕われた皇子の姿をここにも見る事ができるのである。

次は雑歌、軽皇子、後の文武天皇の獵を歌った「安騎野遊獵歌」の中の一首である。

軽皇子の安騎の野に宿りましし時に、柿本朝臣人麿
の作れる歌(内、短歌一首)
日並皇子の命の馬並めて御獵立たしし時は来向かふ

(一四九)

草壁は、長短歌の最後の短歌一首にのみ表現されている。しかしその一首は、軽皇子の獵が、その父、草壁のそれに擬える形で行われていることを明らかにして重要である。今、擬える形での獵と述べたが、そのことにより、軽皇子が草壁からの「皇統」を受け継ぐ者であることを明ら

かにしているのである。例えば『釋注』が、『み狩立たしし時は来向ふ』とうたい納められた時、軽皇子は皇統譜正統の皇子である『日並皇子の命』そのものとして再生されたことを意味する」と述べる如くである。

草壁に関する歌を見て来た。一方は天武から草壁へ、他方は草壁から文武へという「皇位」の継承が歌われていた。両者を合せれば、一つの男系「皇統」譜が現れて来る。作者人麻呂、そしてその背後にいるであろう持統、元明などの人々の意志が、そのような表現を採らせている。

以上、述べたように考えることができるならば、当該歌群、草壁の一一〇歌も、従来言われて来たような、歌群は天津を中心としたものとする見方とは別の視点から、改めて考え直さなければならない、ということになる。部立も先に見たものは雑歌及び挽歌であり、これは相聞である。一一〇歌が、皇位に即くべき皇子の歌、そのような内容を持った歌として読むことができるならば、「元明万葉」に於て、その三大部立のそれぞれが、草壁を、皇統を継承すべき皇子として歌った歌を取めた、ということになり、万葉集を統一的に理解することが可能になる。

三 皇太子の歌

一一〇歌について検討する。初句の「大名児」は、題詞脚注に「石川郎女の字」とする。この石川郎女は、一〇九歌題詞に、大津との関係について「竊かに」としている所から、元は草壁の妻の一人であつたと知られる。しかし草壁は自分の妻を奪われてしまった。このことは一一〇歌表現からも確められる。それは結句「吾忘れめや」に拠る。参考として、人の別れに絡んだ、これと同一句、類似句を持つ歌を次に掲げる。

天平二年庚午。冬十二月に、大宰帥大伴卿の京に向

ひて上道せし時に作れる歌五首（内一首）

軈の浦の磯のむろの木見むごとに相見し妹は忘らえめ

やも

（3・四四七）

大神大夫の長門守に任けられし時に、三輪川の辺に

集ひて宴せる歌二首

（内一首）

三諸の神の帯ばせる泊瀬川水脈し絶えずはわれ忘れめ

や

（9・一七七〇）

前者は、大宰府で妻を亡くした旅人の歌である。傍線部「忘らえめやも」は、絶対的な別れである死を踏まえた表現である。後者は、長門守として赴任する大神大夫の、宴席に

ある人（達）に贈った歌である。旅立ちの後、再び逢えるのは何時であるか分らない、或は再び逢えないかも知れない、という状況の下で、傍線部「われ忘れめや」と歌われている。一一〇歌も、郎女が自分の許には永久に、或は半永久的に戻って来ないという状況の中で、その思いを歌ったものと見てよいであろう。この表現から、先に触れたように、郎女を巡る争いでは大津が女を得て勝利した、と一般的には読み取られているのである。

*

一一〇歌について新しい見方を示してみたい。ここでは、争いに負けたことに對し草壁は、決してそれを否定しようとしたり、相手の男や女と争ったり、況して事態を覆そうとしたりしてはいない、という点に注目すべきであると考ええる。「古典全集」は、「自分を捨てて異母弟大津皇子に逢う石川郎女を引き止めようとして詠んだ歌」としているが、女に對するそのような積極さを、表現に読み取ることとはできない。先の例で確めたように、去った郎女への思いを詠嘆的に歌っているだけである。『注釋』は、「大津皇子の御作に較べて何となくおだやかなおとりした御性格が感ぜられる」と述べている。表現に沿って読めば、このような印象を受ける歌であろう。しかし歌の表現を、知られよう

のない実作者の性格に結び付け解釈は終り、とすることはできない。述べ來つた点を踏まえ、この歌の表現に、どのような觀念、万葉集としての主張が示されているかを考えて行かなければならない。

歌群の主人公は二人の男、草壁と大津、そして一人の女、石川郎女である。この歌群の意味を考える為に、所謂「二男一女譚」と比較してみたい。「二男一女譚」とは、二人（或はそれ以上）の男が、一人の女を巡り、互いに得ようとして争う、という話型である。この女を巡る二人の男の争い、という構図に於て同一である所から、参考として比較してみよう、ということである。

万葉集中では一般の人々の「二男一女譚」を見ることになる。その例として、ここでは「菟原処女の墓を見たる歌一首」（長歌のみ）を掲げる。

葦屋の うなひ処女の 八年児の 片生の時ゆ
小放髪に 髪たくまでに 並び居る 家にも見えず虚
木綿の 隠りてませば 見てしかと 悵憤む時の 垣
ほなす 人の詛ふ時 血沼壮士 うなひ壮士の 廬屋
焼く すすし競ひ 相結婚ひ しける時は 焼太刀の
手柄押しねり 白檀弓 鞆取り負ひて 水に入り 火
にも入らむと 立ち向ひ 競ひし時に 吾妹子が 母

に語らく 倭文手纏 賤しきわがゆゑ 大夫の 争ふ
見れば 生けりとも 逢ふべくあれや ししくしろ
黄泉に待たむと 隠沼の 下延へ置きて うち嘆き
妹が去ぬれば 血沼壮士 その夜夢に見 取り続き
追ひ行きければ 後れたる 菟原壮士 天仰ぎ 叫
びおらび 足ずりし 牙喫み建びて 如己男に 負け
てはあらじと 懸佩の 小剣取り佩き 冬菰蘘葛 尋
め行きければ……（以下略）（9・一八〇九）

男二人は、多くの競争者の中から最後まで残った者達であり、結婚に對する意志も固く、甲乙を付け難かった。そして二人の男の狭間で女が自死し、男二人も後を追ひ亡くなるという悲劇的結末を迎える。「二男一女譚」は集中、卷一六・三七八六歌前文、同じく卷一六・三七七八歌前文にも見られる。この二つの話では男達が死ぬことは無いが女の自死はあり、結末が悲劇に終ることには変り無い。いずれも一般の人々に於ける「二男一女譚」では、男達は競争相手に譲ることなく争い、その結果、悲劇を呼んでしまうと言うことができよう。

当該一〇歌はどうか。草壁は天武一〇年二月以降、皇太子の地位にあった。大津は単なる皇子ではあったが、天武一二年二月、特に「皇太子とともに国政に参画すること

「二女」¹²⁾になった。天武朝末期、大津は草壁に継ぐ皇位継承の有力者であった。このような二人であったが、集中に見られる「二男一女譚」とは、その結末に於て大きく異なっている。つまり、女の自死という悲劇的結末を迎えてはいないのである。それは述べたように、草壁が争いを避け、女を盗られた、女が去って行った事態をそのまま認めているからである。この点に於て、当該歌群は、集中の「二男一女譚」とは異なっている。

何故、草壁は争いを避けたのか、争ってでも女を引き止めようとしなかったのは何故か。集中の「二男一女譚」は、一般の人々のそれであった。男達の身分が異なる場合、具体的には皇位にある、或は皇位に近い皇子に於ける女を巡る争いにあつては、一般の男達とは異なつた在り様を示すのではないかと推測される。当該歌群に類似した身分の者達による、女を巡る争いの例を見ておきたいと考える。しかし万葉集には適切な例が無く、以下、記紀に於ける皇位にある者、皇位を伺う、また皇位を伺える地位にある者の間での争いの事例を見て行くことになる。

*

述べた天皇、皇太子、皇子達による女争いの記事を次に掲げる¹⁴⁾。記事の一部は要約したが、それは括弧に括つた。尚、

「二女」ではなく、「二女」の例もあるが、「二女」であることに特に意味は無く、ここに含めてある。

1a 景行記

（景行天皇が、美濃国から召し上げた女二人を、その使いに立つた天皇の子、大碓命が横取りし、他の女二人を代りにそれと偽つて貢上した。）是に、天皇、其の他し女なることを知りて、恒に長き暇を経しめ、亦、婚ふこと勿くして、惚ましき。

1b 景行紀四年二月条

（景行天皇が、美しいと噂で聞いた美濃国造の女二人を察せに、大碓命を遣わした。）時に大碓命、便ち密に通じて復命さず。是に由りて大碓命を恨みたまふ。

2a 応神記

（応神天皇が日向国から髪長比売を召上げた時、見初めた大雀命が、建内宿禰大臣を介して天皇に請い、比売を賜つた。その髪長比売を大雀命に）賜へる状は、天皇、豊明を聞き看す日に、髪長比売に大御酒の柏を握らしめ、其の太子に賜ひき。

2b 応神紀一三年九月条

（応神天皇が日向国から喚し上げた髪長媛を、その皇子大鸕鷀尊が見初め、そのことを知つた天皇が、媛を尊と

結婚させようと思った。）是を以ちて、天皇、後宮に宴とよのあかりしたまふ日に、始めて髪長媛を喚し、因りて宴とよのあかりのみき席に坐らしめたまふ。（そして天皇は媛を尊に賜った。）

3a 仁徳記

（仁徳天皇が、弟速総別王を媒として庶妹女鳥王に求婚しようとした。しかし女鳥王は、自身の意志で速総別王と結婚し、弟王は復奏しなかった。そこで天皇は、女鳥王の御殿に向いた。）爾くして、天皇、歌ひて曰はく、

女鳥の我が大君の織ろす機誰が料るかも （記六六）

女鳥王、答ふる歌に曰はく、

高行くや速総別の御襲衣料

（記六七）

故、天皇、其の情を知りて、宮に還り入りき。此の時に、其の夫速総別王の到来れり。時に其の妻女鳥王の歌ひて曰はく、

雲雀は天に翔る高行くや速総別雀取らさね

（記六八）

天皇、此の歌を聞きて、即ち軍を興し、殺さむと欲ひき。

3b 仁徳紀四〇年二月条

（仁徳天皇が、隼別皇子を媒として、雌鳥皇女を召し入れ

ようとしたが、皇子は自ら皇女を娶つて復命しなかった。天皇は皇女の寝室に出掛けられ、そこで皇女の機織女の歌を聞いた。）爰に天皇、隼別皇子の密に婚けたることを知りて恨みたまふ。然れども皇后の言に重り、亦友于の義に敦くしまして、忍びて罪したまはず。俄くして、隼別皇子、皇女の膝に枕して臥し、乃ち語りて曰く、「鸛鶴と隼と孰か捷き」といふ。曰く、「隼は捷し」といふ。乃ち皇子の曰く、「是、我が先てる所なり」といふ。天皇、是の言を聞しめして、更に亦恨を起したまふ。時に隼別皇子の舍人等、歌して曰く、

隼は天に上り飛び翔りいつきが上の鸛鶴取らさね

（紀六〇）

といふ。天皇、是の歌を聞しめして、勃然に大きに怒りて曰はく、「朕、私恨を以ちて、親を失ふを欲せず、忍びてなり。何の讐ありてかも、私事をもて社稷に及さむとする」とのたまひ、則ち隼別皇子を殺さむと欲す。

4b 履中即位前紀

（履中天皇が即位前、実弟住吉仲皇子を遣わし、婚約した黒媛に結婚の日取りを告げさせた。その夜、仲皇子は皇太

子の名を騙^{かた}つて黒媛を犯した。)太子、自づからに仲皇^{おの}子の名を冒^{みな}して、黒媛に姁^{たは}けしことを知ろしめし、
則ち黙^{すなは}して避りたまふ。

爰に仲皇子、事有らむことを畏りて、太子を殺^しせまつらむとし、密に兵を興^{おこ}して、太子の宮を囲^{かこ}む。(その後、危機を逃れた太子は、弟瑞^{みづは}蘭^わ別皇子を用いて仲皇子を殺し、履中天皇として即位する。)

二人或は三人の男の間で、譲り引くことの無い争いが繰り広げられる、万葉集の「二男一女譚」とは異なった様相を見せている。各項別に補足しておく。

1aでは、女を子に奪われた景行天皇は、しかし大碓命に對し、直接的にはどのような行動も取らなかった。そして後に、弟小碓命が兄大碓命を、女とは関係無い理由で殺すことになる。奪った女に對し、大碓命は結婚し、子をも生じた。景行は、奪われた女達には何等の行動も取らなかったと思しい。結果的に譲った形になっている。

1bも、景行が子である大碓命に、召し上げようとした女を奪われる話である。しかし天皇はこれに對し、何等の処分もせず、後に命を美濃国に封ずることになる。女に對する記述は無いが、景行四〇年七月条に大碓命を「身毛津^{むけつ}君」の祖としており、これを記の結婚して生ませた子に付せら

れた注「牟宜^{むげつ}都君等」の祖と重ねられるとすれば、1a同様、女に對しても特に咎める所は無かったと思われる。これも譲った形である。

2aは、大雀命が、応神天皇の召し上げた女を見初め、大臣を使いとして天皇に申し入れて女を賜った、というもの。2bも同じく、応神天皇が召し上げた女を、子大鷦鷯尊が見初めた、というもののだが、この場合は、天皇が大鷦鷯尊の氣持を事前に察して召し上げた女を賜っている。2a・2b両者は天皇の描かれ方に違いを見せているが、しかしいずれも天皇が大雀命(大鷦鷯尊)に女を賜る、譲ることで、円満に事が解決されていることは共通している。

また2aに於て、大雀命が女を賜る際、大臣を使いとして天皇に申入れを行っている。命の天皇に對する非礼とも言ふべき要求だが、しかし独断、秘密裏には行動せず、宮廷内の長老、建内を介することで、事を慎重に運ぼうとしている。この大雀命の態度には注意を払うべきである。周囲との摩擦を避け、調和を図りつつ事を為すのは、皇位に即くべき者の態度である、という古事記の主張なのである。大雀命は、後に仁徳天皇として即位する。

3aと3bは、共に天皇に對する謀反の話である。そして謀反の結果、男女共に殺される、という点も共通している。

異なる所は、3aでは女が、3bでは男が謀反を主導して行くといった、女の主体性である。ここで注意しておかなければならないのは、謀反の意志が表明された歌「雲雀は…」（3a・記六八）、「雫は…」（3b・記六〇）以前では、各傍線部の如く、天皇は具体的な行動を起していないことである。3aでは我慢し、気持を抑え、3bでもまだ「恨み」に止まっている。即ち、皇位に関らない、つまり謀反には至らない、単なる一人の女を巡る争いの段階では、自身の心を抑え、競争者を討つには至らないのである。前四項、1aから2bで見た、「讓る」態度につながるものである。殺すことを決心するのは、共に「仁徳を殺せ」の意味を持つ二首、記六八、紀六〇歌により、はつきりと謀反の意志が示された時なのである。

4bは、履中天皇の即位前の話であるが、履中は既に皇太子の地位にあった。履中の娶ろうとした女が、その媒となった履中の弟住吉仲皇子により犯された、というものである。しかしその犯しの事実を知った後も、履中は傍線部「黙して避りたまふ」と、具体的な行動を仲皇子に押し取ることは無い。讓る態度である。結局、仲皇子は殺されるが、それは履中の報復を恐れた皇子が、自ら履中に戦いを仕掛けた為である。履中の仲皇子征討は、皇子の武力行使の後

に行われている。

女「黒媛」のその後だが、「黒媛」の系譜は、履中紀に二箇所出て来る。即ち、即位前紀には「羽田矢代宿禰が女黒媛」、系譜を記す元年七月条には「葦田宿禰が女黒媛を立てて皇妃としたまふ」とある。これを同一人物とすれば、謀反の首謀者に犯され、奪われた女も皇妃として迎えられ、何事も無かった、罪されることは無かったと知られる。また別の人物とすれば、その後の動静は不明、ということになる。しかしその場合でも、罪を得た等の記述が無いことは注意されてよい。

見て来たように、記紀の天皇、皇位に近い皇子達による女の争いにあつては、常に決定的な衝突は回避され、奪われた女も罪を得ることは無かった、また自裁することも無かったのである。結果的にそれが謀反につながり、天皇、皇太子の側から討伐されることはあっても、女を巡る争いが、直接的に争いや悲劇につながることは無いのである。そして衝突の回避は、天皇と皇子との争いにあつては天皇が、そして皇太子と他の皇子との争いにあつては皇太子が、といった具合に、皇統につながる人物が一步引き下がり我慢し、女を相手に譲るのである。述べたことは、記紀の間で違いが無い。相手に譲れる所は譲り、決定的な争い、破

局は避けるべきであるとする、統治者としての行動規範が、当時、一般的通念としてあった、と考えてよいであろう。尚、念の為に言い添えれば、女を奪う側である大雀命(2a)も、皇位を継承すべき人物として、述べたように、周囲への配慮を怠ることは無かったのである。

以上のような記紀に於ける天皇、皇位を継承すべき皇子像と、草壁の一一〇歌とは、共通性を持つと言えないであろうか。草壁は自分の妻の一人を大津に奪われてしまった。しかしそれを以って大津に対し報復しようとするわけではない。ただ去って行った女への思いを歌うのみである。そのような女への思いのみを歌う態度は、自身の心を抑え、譲れる所は譲り、穏かな解決を目指すとする、先の記紀の天皇、皇統を受け継ぐ皇子像に重ねられると考えるのである。皇太子草壁の一首はこのように理解されるべきではなからうか。

一方、大津は歌群の中では、草壁とは全く逆の資質を持った人物としてあった。他人の妻と関係結び、その関係が暴露されてからも、何等、反省する所が無い。一〇九歌では、自己の独善的な行動を誇っている。このような周囲との摩擦を考慮しない態度は、記紀では正統な皇位継承者とは成り得ていないのである。争ってでも女を得ようとする、

る、万葉集中の一般の男の取る態度と言えよう。

述べたような理解が可能であれば、草壁皇子は持統朝発足時、皇位に即き得る資質を持った皇太子であり、将来を嘱望されていた皇子ということになる。持統称制期は、その皇太子の即位が待たれた時代であったという、「元明万葉」編纂者の意図をそこに認めることができるのではないであろうか。先に述べた「日並皇子尊挽歌」(2・一六七)「皇子尊の宮の舍人らの働しび傷みて作れる歌二十三首」(2・一七一―一九三歌)は、人々のそうした意志の表現化と見ることができる。このように考えてこそ、本稿が問題とした、相聞の持統代冒頭に、謀反首謀者の歌を含む歌群があることの意味を理解できよう。歌群は、草壁皇子は若くして亡くなり、その資質を政治の世界で生かすことはできなかったが、しかし其の資質を持った者として顕彰する為、持統代冒頭に置かれたものと考えるのである。

四 おわりに

部立「相聞」は、公的な、或は天皇にまつわる雑歌、また人の死に関る挽歌とは異なる性格を持つ。相聞には、人と人との私的な関係の中での歌が集められている。人々は歌により私的な思いを伝え合い、互いの関係を作り上げて

いった。歌の遣り取りの中に人々の社会生活があり、宮廷生活があった。人々の私的な側面を見ることが出来る相聞の歌々は、また私的な場でしか知りえない、人の性格、世知、才能といった側面を知り得るものでもあった。そのような相聞の歌に託して、万葉集は、草壁の人物像の一面面を明らかにしようとしたのではなかったか。皇位に即くべき資質を持ち、また皇位に即くことが期待された草壁の、その穏かな、円満な性格の一端を、大津と比較しつつ、草壁皇子に関する相聞歌群として表して見せたものが当該歌群である、と考えたのである。

【注】

- (1) 万葉集からの引用は、中西進『万葉集全訳注』（講談社文庫）による。但し、一一〇歌は、稲岡耕二「和歌文学大系」（明治書院）に拠った。
- (2) 石川「イラツメ」の表記が、当該歌群に於て、「郎女」と「女郎」とに分れているが、各々の歌の結び付きの緊密さから、同一人物と考えるべきである。以下、「郎女」に表記を統一する。
- (3) 岡田精司「古代における伊勢神宮の性格―私幣禁断をめぐる一―」（塙書房『古代祭祀の史的研究』平成四年一〇月）
- (4) 折口信夫「万葉集の恋歌」（『全集九』中公文庫）では「第一の夜」としている。
- (5) 都倉義孝「大津皇子とその周辺―畏怖と哀惜と―」（有精堂『万葉集講座 第五卷』昭和四八年二月）
- (6) 編纂者の「営為」について述べる。本文では配置、具体的には標との齟齬という問題に限って触れた。しかし「営為」には、他に様々な可能性が考えられる。流布している歌の流行、或はその一部改変、個々の歌の配列、また題詞、脚注の創作等々である。一般に「仮託・仮構」と呼ばれる、そのような「営為」に、本稿は触れなかった。「仮託・仮構」の内実を探り、歌群形成の意図、即ち、本稿の目的である歌群の意義を、論理に拠り明らかにすることは難しい、と考えたのである。この点に関し、従来の論について言えば、大津中心の歌群という理解を前提とした上で、「仮託・仮構」の内実を推論しているに過ぎない、と考えている。
- (7) 伊藤博「万葉集の構造と成立 下」（塙書房 昭和四九年一月）
- (8) 折口信夫「国文学」（『全集一四』中公文庫）他の言う「いろいろのみ」である。
- (9) 題詞の「移葬」については、「殯宮から葬地へ屍を移すこと」、「仮の埋葬後、葬地に移すこと」という二つの理解があるが、

後者の理解が良い。

- (10) 大津の怨霊化については、多田一臣「大津皇子物語をめぐって」(三弥井選書『古代国家の文学―日本霊異記とその周辺』昭和六三年一月) 他を参照した。

- (11) 品田悦一「掘りかえす痛み―大伯皇女の大津皇子哀悼歌をめぐって」(高岡市萬葉歴史館『高岡市萬葉歴史館叢書一七 悲劇の皇子・皇女』平成一七年三月)

- (12) 天武紀一二年二月一日条に、「大津皇子、始めて朝政を聴^{きこ}しめす」とある。但し、その内実は不明である。本文に引用したのは、岩波旧大系『日本書紀 下』同条の頭注である。

- (13) 本来であれば、万葉集中の例を参考にしたいと考えるが、本

文で述べたように、その確例が無い。天智天皇の所謂「三山歌」(巻一・一三～一四歌)と、天武天皇と額田王の「蒲生野遊獵歌」(巻一・二〇～二二歌)により、天智、天武と額田王の間に、これを想定することが可能と言える程のものしかない。

- (14) 引用は、古事記、日本書紀共に、「新編全集」に拠った。尚、念の為に言い添える。清寧記に於ける、袁^{をけのみこと}祁^{しび}命と志^{しび}毘との大魚を巡る争い、また、武烈即位前紀に於ける、皇太子(武烈)と鮎^{しび}との影媛^{かげひめ}を巡る争いも「二男一女」の形である。しかしこれらは、一方が臣下であり、一一〇歌検討の直接の参考にはならないと考え、除いた。